

紀要『人文・自然研究』第18号

## 日本におけるリー・ハント研究

江澤美月



2024年3月25日発行

一橋大学 全学共通教育センター

# 人文・自然研究 第18号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 18



2024年3月25日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中 2-1

組版：精興社

# 日本におけるリー・ハント研究

江澤美月

## はじめに

イギリスの詩人、エドモンド・チャールズ・ブランデン氏 (Edmund Charles Blunden, 1896-1974) は、第二次世界大戦 (1939-45) より前に、東京帝国大学の英文学教師として招聘され、戦後には、文化使節として日本各地で 600 回以上講演を行い、日本の復興に貢献した人物だった。日本の学生や研究者への影響力の大きさにおいて、氏は小泉八雲 (ラフカディオ・ハーン, Lafcadio Hearn, 1850-1904) と並び称されることが多い。また、氏は平和主義者として、広島に詩碑があることが知られている。本稿では、ブランデン氏がイギリスの詩人であり、文芸批評家であり、ジャーナリストであったジェイムズ・ヘンリー・リー・ハント (James Henry Leigh Hunt, 1784-1859) の初期の伝記作家であったことに注目し、ブランデン氏とその周辺の人々から、第二次世界大戦前後の日本におけるハント研究について考察する。

## 1. ブランデン氏来日の背景

ブランデン氏は 1896 年 11 月 11 日ロンドンで生まれ 1909 年に、サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) やチャールズ・ラム (Charles Lamb, 1775-1834) やハントを輩出したことで知られるクライスト・ホスピタル・スクールに入学した。氏は第一次世界大戦 (1914-18) 勃発の翌年 1915 年に同校を卒業してオックスフォード大学進学後、ロイヤル・サセックス連隊に入隊し、ソンムなど激戦地での従軍を経験した。大戦終結後大学に復帰したブランデン氏は、やがてジークフリード・ローヌ・サスン (Siegfried Loraine Sassoon, 1886-1967) と共に非戦を訴える詩人としての地位を確立していく (齋藤「ブランデン」117)。ちょうどその頃東京帝国大学では、ロバート・ニコルズ氏 (Robert Nichols, 1893-1944) の後任を探す人事があり、イギリスに留学中であった齋藤勇氏 (1887-1982) が、市川三喜氏 (1886-1970) に一任されて交渉にあたった。この時のいきさつについてブランデン氏の著書『さよなら日本 (*A Wanderer in Japan*)』を 1957 年に翻訳した富山茂氏 (1902-) は、巻末で、ブランデン氏の言葉を交えながら次のように語っている。

一九二三年のことであるが、ブランデン氏は「ロンドンから何里もはなれた所」に居をかまえていた。するとその文筆仲間のものが「英文学を愛好している若い日本人で、非常に熱心であり、その知識も正確な上に人柄も一目おかせる」人物が来ているということを知らせてきた。氏はこれを聞くといたくよろこんで、早速その日本人に会うよう手筈を整えたのであった。すると彼はブランデン氏の返事に応じ、氏の住んでいた田舎まで出向くことになったわけである。「当時ロンドンから出て、ケムブリッジ線から先へ行く汽車は、始終旅行しているものでも、迷いがちであるのであるが、そ



の知らせてきた汽車がクレア駅にすべりこんで来た時、小柄で端正な、そして丈夫そうなきびきびした」紳士が降り立ったのである。そして二人は固い固い握手を交わした。これが齋藤勇博士であった。「そのプラットホームでの態度はもの静かで落ち着いてなごやかであり、古い知己であるかのようにであった。」（富山 156-157）

その後自宅の蔵書に感嘆する様で齋藤氏の学識の深さを知ったブランデン氏は（富山 157）、関東大震災（1923）直後の日本へ行くことを承諾し、1924 年に来日して三年間東京帝国大学で教鞭をとった。当時受講生の一人で、後に小説家になった上林暁氏（1902-1980）は、恩師から受けた影響を次のように語っている。

その影響を一言で盡せば、ブランデン先生の講義に出ることによって、詩人的雰囲気を得たことであった。それはプロフェッサー的な雰囲気とは、全然異なるものであった。私は今でも先生の滑らかな舌に乗って、リヤ王が荒野をさまよふ條が講讀された時、うっとり聞き入ったことを忘れることが出来ない。（上林 38）

上林氏の言葉から、ブランデン氏の講義は、詩人としての鑑賞力を基に文学の持つ魅力を伝えるものであったことが窺われる。東京帝国大学での三年間の任期を終えたブランデン氏が 1927 年に帰国した後、日中戦争（1937-1945）そして第二次世界大戦（1939-45）が起こっている。戦後間もなくブランデン氏の著作『英文学の主流（*Two Lectures on English Literature*）』（1948）が氏の教え子の阿部知二氏（1903-1973）と尾上政次氏（1912-1994）によって翻訳された時、当時東京女子大学の学長（1948-54）になっていた齋藤氏はその序文で、戦時下の 1938 年 1 月、ブランデン氏が『リスナー（*Listener*）』誌に日本にも平和を希求する者が少なくないことを信じる詩を投稿したのを見つけ、その人道主義的な友情に感銘を受けたと語っている（齋藤「序」12-13）。それから 30 年後の 1968 年、齋藤氏は『日本の英学 100 年 大正編』の中で再びこの時のことに触れ、日本軍による南京攻略の時のことであったとした上で、ブランデン氏の詩「餘白にしるす（“In the Margin”）」を次のように紹介している。

題意は、新聞雑誌が特筆大書していることとはちがひ、その余白にしか載せられない少数意見ということであろう。また日本は平和を好むか戦争の罪惡を犯すか、すれすれの危機に立っている、という意味も含まれているようである。

とにかく、彼はいう。——「あの侵略的行動は、イギリスから見、また当時の事情から考えれば、日本人全体の行動のように見えるが、その軍隊を賞めたり弁護したりする者はまずあるまい。またこの非人道的な無理な戦争は何か不名誉な結末に引きずり込まれて、殺戮、放火、醜行になるだろうと、私もまた日本軍の行為に対して恐れ、驚き、あやまさないわけにはいかない。そして毎日砲弾を爆裂させることの手柄話は、古来日本がかち得た名声を打ち消してしまったことになったのであるまいか。しかしその戦塵の間にもなお、私は見ることができる。そして忘れることがない、その戦塵だけではなく、「日本」という偉大な名に附随する多くのものを。汚れを知らない忠誠の心をいづく人々の澄んだ瞳が、私には今も見える。都大路の人だかりの中を、高德な半白の老人があるいている。また貧しい農夫たちの田畑からは、昔ながらのなごやかな唄が聞こえてくる。」

日本軍の南京攻略当時、英米人が日本を弁護することは、全く困難であったろう。



弁護すれば、思いがけぬ圧迫を受ける危険があったかもしれない。そう考えると、ブランデンがこの詩を読者の多い雑誌、しかも半ば国立である放送協会発行の週刊誌に公表したことは、とくに注意すべきことである。(齋藤「ブランデン」117-118)

齋藤氏は、日本を責める圧倒的多数の論評の中で、自らの身を顧みず、日本を信じてくれたことへの謝意を示していると言える。なぜ二人は、これほどまでの友情で結ばれたのだろうか。

## 2. ブランデン氏とリー・ハント

ブランデン氏は初めて来日した際、リー・ハントが編集した雑誌『エグザミナー (The Examiner)』について論じた『リー・ハントのエグザミナー調査 (Leigh Hunt's "Examiner Examined")』を執筆中であった。帰英後の1928年に上梓された同書の序文で氏は、『エグザミナー』を使用する便宜を図り、多忙な時間の合間を縫って大部な雑誌内を検索する助力を惜しまなかった齋藤氏への謝意を示している (Blunden v)<sup>(1)</sup>。ブランデン氏の教え子の福原麟太郎氏 (1894-1981) によれば、当時の齋藤氏の書齋は、「ブランデンが通ってリー・ハントの研究その他をともした所でありブランデンの遺跡の一つ」とも言える場所であった (福原「エドモンド・ブランデン」106)。齋藤氏自身も日本英文学会の学会誌『英文学研究』でこの『リー・ハントのエグザミナー調査』の書評を行った際、同著への関与を自負している。

彼 [Leigh Hunt] は長詩 *The Story of Rimini* 及び短詩 *About Ben Adhem, To T. L.H.* などの作者としても永く記憶されるであらうけれども、彼が当時の文壇に雄飛せるは寧ろ journalist としてである。その生涯は年少気鋭の時に始まった。そして二十四歳の "the dashing, careless, fiery-spirited, and fancifully spectacular young Leigh Hunt" は、既に雑誌経営の事に通ぜる長兄 John と共に *The Examiner* を創刊した。時に1808年一月。その題は Swift の保守的新聞 (1710-11年) と同名であるが、その内容は全然反対で、自由の精神に充ちたものであった。その sub-title "A Sunday Paper on Politics, Domestic Economy and Theatricals" が示す如く、この週刊新聞は当初純文学と縁の深いものでなかったため、従来の文学史家や文学研究家は同紙に対して注意をすることが余りに少なかったけれども、1816年から1819年までの四巻は Romanticism ことに Shelley, Keats 及び Byron, Hazlitt 及び Lamb (L. Hunt は勿論) の研究資料として甚だ重要なものである。L. Hunt が caricature の対象となり、Cockney school の張本人と誤解され、殊に乱暴な急進思想の代表者と目せられてゐたため、この恕すべからざる閑却が長く続いてゐたのであろうけれども、今や Blunden 氏のため、*The Examiner* の史的地位が明らかにせられ、且つ今日容易に見ることの出来ないその資料の重なる物が提供されたことは、読書子のために喜び、Blunden 氏のために賀すべきことである。同氏の本邦在任中、同じ机に対つて本書の或る部分の仕事と共にせる私としては、心地よい思出が特に深い。(精勤な著者は本書の大部分を東京で書き上げたのであるが、帰英後更に研究を重ねてこの大冊を成すに至ったことをここに書き添えても悪くあるまい。)

(齋藤「Blunden 氏の新著」625-626)

齋藤氏は、文筆家としてのリー・ハントの真骨頂は、『エグザミナー』におけるジャーナ



リストおよび批評家としての仕事にあり、長く注目されていなかったその部分に切り込んだブランデン氏の着眼を高く評価している。引用中に出てくる Cockney school、「詩のコックニー派」とは、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン (*Blackwood's Edinburgh Magazine*)』がリー・ハントに対して行った一連の批判の中で用いた呼称である。また、ブランデン氏の帰英後の研究に関しては、在日中氏と親密な関係にあり、氏と共に渡英し帰化した林アキ氏 (1889-1962) の貢献が大きいことが指摘されているが<sup>(2)</sup>、ここで重要なのは、齋藤氏自身がブランデン氏への助力を自認していることである。

話を齋藤氏の書評に戻すと、齋藤氏は続けてその内容について次のように述べている。

この新著は二部から成る。第一部は、1808年創刊号から1825年L. Huntが同紙を去るに至るまでの *Examiner* 史にして、第二部は文学上重要な文献を同紙から抜粋せるもの。前者は、当時の文壇に関する該博な知識を以てなせる精密な研究と、詩文に対する確実な鑑賞力とを、典雅にしてしかも清新な筆を揮って簡潔に記せる歴史的論評であり、後者は夙に Keats 及び Shelley の天才を認めた Hunt の評論及び無署名のため従来注目されなかったが C. Lamb の作と Blunden 氏の認定せる散文並に韻文六篇等の再録である。かくて、本書はひとり Leigh Hunt のみならず当代文学の研究者にとっては、特別の注意と尊敬とを当然の権利として要求し得る。

(齋藤「Blunden 氏の新著」626)

齋藤氏は、ブランデン氏の著作がロマン派の研究に大きく貢献する点を高く評価しているが、これは齋藤氏が当時キーツ (John Keats, 1795-1821) の研究を進めていたことと無関係ではないだろう。その後ブランデン氏が1930年に上梓した『リー・ハント伝 (*Leigh Hunt: A Biography*)』についても齋藤氏は、「この誤解されがちであった文人に対する決定的な評伝である」と自らが上梓した『イギリス文学史』(1974)でブランデン氏によるハントの再評価を高く評価した(齋藤『イギリス文学史』599)。そしてその註で「この評伝との姉妹篇 *Leigh Hunt's "Examiner" Examined* (1928) は、東京大学在任中の研究である。」(齋藤『イギリス文学史』599 n.1)とブランデン氏の日本における研究、執筆活動を支援したことへの自負をのぞかせつつ回想している。

日中戦争中の1938年、齋藤氏が『リスナー』誌を通じて、ブランデン氏と心を通わせたエピソードは先に触れたが、翌年の1939年第二次世界大戦が始まった年に、齋藤氏が英米文学研究家のために便宜を図って作成した『英米文学年表』(1939)に挙げられたハントに関する事項を抜き書きすると次のようになる。

- |              |   |
|--------------|---|
| 1784年        | Leigh Hunt 生まる。(40)   |
| 1808年 (文化五年) | Leigh Hunt, <i>The Examiner</i> を創刊し1821年まで主筆たり。(47)  |
| 1811年        | Hunt: <i>Feast of the Poets</i> 詩 ( <i>Reflector</i> に掲載) (49)                                  |
| 1815年        | Hunt: <i>Descent of Liberty, a Masque</i> 詩 (50)  |
| 1816年        | Hunt: <i>Story of Rimini</i> 詩 (51)   |
| 1817年        | Hazlitt: <i>The Round Table</i> 散 ( <i>The Examiner</i> 1818-7より集めたるもの Leigh Hunt との合著 (51-52)) |
| 1819年        | Hunt: <i>Indicator</i> (1821年廃刊) (52)   |
| 1822年 (文政五年) | Leigh Hunt, <i>Liberal</i> を創刊す。(四号のみ、1822-3) (55)  |



|             |   |
|-------------|---|
| 1828年       | Hunt: <i>The Companion</i> (No. 28にて廃刊) 散 (58)    |
| 1835年       | Hunt: <i>Captain Sword and Captain Pen</i> 詩 (62) |
| 1850年(嘉永三年) | Hunt: <i>Autobiography</i> 散 (71)                 |
| 1851年       | Hunt: <i>Table-Talk</i> 散 (72)                    |
| 1859年(安政六年) | Leigh Hunt 死す。(78)                                |

(各項目末尾のカッコ内の数字は年表の頁を示す。)

齋藤氏が西暦の後にとりどころ加えた元号から、ハントが生き活躍した時代は、日本では江戸時代に当たることがわかる。特にハントが『エグザミナー』の活動を開始した1808年(文化五年)には国内の出来事として、「佐藤信淵(1769-1850)『西洋列国史略』」が挙げられているが(齋藤『英米文学年表』48)佐藤は筆禍によりしばしば江戸から追放された幕末の学者である。また、ハントが自伝を上梓した1850年(嘉永三年)には、「幕府洋書の翻訳流布を制限す。高野長英自殺す。」とあり(齋藤『英米文学年表』72)、齋藤氏は、幕府の鎖国政策に反対して蛮社の獄で終生入牢を申し渡されたが、脱牢し翻訳を続けた高野長英(1804-1850)の自殺を挙げ、幕府による言論統制の中、志を持ち続け開国を主張しつづけた日本人の活動時期とハントの活動時期を重ねることで共に言論の上で困難な時代であったことを示唆している。

### 3. 植村正久氏とリー・ハント

さらに齋藤氏がブランデン氏のハント研究を支援した背景には、齋藤氏がキリスト教信仰の面で影響を受けた植村正久氏(1858-1923)の存在があった。植村氏とプロテスタント信仰そして英文学の関連について齋藤氏は、先に触れた『イギリス文学史』で次のように語っている。

幕末(詳しくは1859年)にアメリカから来た Protestant missionaries の中には、相当な学者もいたので、熱心に日本語を学び、幸い適当な日本人助手を得て、1879(明治12)年邦訳「新訳聖書」、また1887年「旧約」を公にし、また私塾を開いて英書を教え、いわゆる横浜 Band に属する有為な伝導者を養成した。また札幌および熊本にも同様の青年キリスト者群が発生した。そしてそれら三つの群から、植村正久(1858-1923)、内村鑑三(1861-1930)、新渡戸稲造(1862-1933)、徳富蘇峰(1863-1957)など、英米文学のすぐれた紹介者或いは英文著者が現れた。

(齋藤『イギリス文学史』611-612)

ハントの紹介は、この流れの中で、植村氏によって行われることになる。齋藤氏は先に触れた『英米文学年表』と同年に編集出版した『植村正久文集』(1939)のあとがきで次のように述べている。

ダンテについては「福音新報」明治三十七年三月二十六日号に「ダンテ集を読みて感を記す」を載せ、また聖フランチェスコについてはサバティエの伝を同誌一九〇一年一月十六日号に紹介して居られる。リー・ハントの全貌を日本語で伝えた本はやうやう数年前に現れたのであるが、先生は一九〇一年四月二十四日「病苦にして志を立つ」といふ題のもとに彼について書いた。(齋藤編『植村正久文集』221-222)



「リー・ハントの全貌を日本語で伝えた本」についてはこの後触れることにして、まず、植村氏がハントについて書いた「病苦にして志を立つ」を確認したい。1901年4月24日の「福音新報」を見ると、植村氏は、「英国の文豪レイ・ハントの父は牧師にして、其の子をもまた同一の聖職に就かしめんことを望めり。」〔植村〕709〕と書き出し、ハントの家が牧師の家系であることから説き起こしている。表題となっている「病苦」とはハントが幼少の頃にかかった病によるものであり、植村氏はハントの自伝 (*The Autobiography of Leigh Hunt*) (1850) の第一卷第八章「病苦とその影響 (“Suffering and Reflection”)」から次の部分を翻訳引用している。

余は此の苦痛によりて一大恩恵を蒙りたり。余は到底之なくは得る能はざるべきほど多くの思想を得たり。故に若し読者にして余の著書の大切なる部分に就きて感服すべきものを発見することあらば、余は之を以て病苦の経験に帰す。其は余に忍耐を教へ、寛大愛憐を教へ、自己に対する寛大愛憐をさへも教へ、大なる苦痛の利益と威厳とを教ゆると同時に、小なる快樂の価値をも教へ、害悪其のものにも亦幸福を含むことを教へ、深く考へ来らば害悪と称すべきもの存在するや否や、又我等の知り得る限りにおいて之なくして幸福なるものあるべきや否や、然れども之を打ち毀たんと欲するの念自ら我等の心に存するは、其の目的を達するの信号にして且つ其の手段なるにあらざるや否や、之を破壊すれば遂に其の存在こそ真の幸福に必要ななからんかを考ふるに至りぬ。

〔植村〕710, cf. Hunt vol. 1 298)

そして植村氏は、この闘病経験がハントのその後の著作活動の原動力になっていると分析している。

此時よりレイ、ハントは全く甦りたるが如く軽薄なる所微塵もなくなり、性来好める快樂も亦意を留めざるに至り、厳格にして有用なる生涯を送らんことを期し、読書界に全力を盡すべしとの決心を堅めたり。此に其の生涯の区画を為し、新しく高く、貴く、大なる道に進み行けり。疾病は学校若しくは書籍を以て興ふ可らざるものを彼れに寄興せり。苦痛は其の生涯の方針を急激に一変せしむるに足るの力あり。彼は之によりて愈よ文学の為に其の身を献ずべき責任を帯びて此の世に生れたるを悟りぬ。

〔植村〕710)

そして『エキザミナル』で「正義と信ずる所は飽くまで之を保護し」、「厳正に社会の罪悪を批評し」〔植村〕711) た結果、禁錮に処せられたが、それで気をくじかれることなく、獄中からも『エキザミナル』に寄稿し、出獄後も活動を辞めなかった、と述べている。そして「彼れは名誉若くは富貴の為に筆を執らず、其の唯一の目的は人類の進歩を助くるに在りしなり。」〔植村〕711) とあくまで世のため人のために尽くした献身的な人生に賛辞を送っている。これはブランデン氏がはじめて来日する20年程前の事であり、齋藤氏は既に植村氏が伝えたハント像に感銘を受け、社会改革のために、自らを犠牲にしてまでも奔走したハントの仕事の重要性を把握していた。そのためブランデン氏のハント研究に助力を惜しまなかったのだろう。また後の話になるが、齋藤氏は、「餘白にしるす」で自分たち日本人のことを気遣ってくれたブランデン氏に、ハントの影響を見たのかもしれない。





#### 4. 上代たの氏とリー・ハント

最後に、「リー・ハントの全貌を日本語で伝えた本」について考察したい。齋藤氏が1939年に述べていることから、この本は、齋藤氏が協力した研究社の英米文学評伝叢書の中に収められ、後に日本女子大学の学長（1956-65）となる上代たの氏（1886-1982）による『リー・ハント (Leigh Hunt)』（1936）であると考えられる。英米文学評伝叢書は岡倉由三郎氏（1868-1936）と市川三喜氏を主幹とし、齋藤氏や福原氏の協力により、研究社から発行された100巻の英米古典の全集だった（齋藤監修『英米文学辞典』377）。先述した齋藤氏の『英文学年表』は同評伝叢書の別冊1にあたる。1909年にキリスト教に入信していた上代氏は（上代たの文集444）、1926年夏、ジュネーブのクェーカー教会で、既に親交を深めていた新渡戸稲造氏（1862-1933）等の祈りを目の当たりにしたことで、平和主義の教義を持つクェーカー主義に強く惹かれるようになった（上代たの文集445）<sup>(3)</sup>。それは上代氏が当時国際連盟事務次長を務めていた新渡戸氏の助言を受けつつ、ダブリンの婦人国際平和自由連盟に日本代表として出席し、日本の状況を説明していた頃である（島田59-60）。上代氏の『リー・ハント』は、1933年3月に日本が国際連盟から脱退し、同年10月に新渡戸氏の死を迎えた後の1936年に出版されるが、この中には、ハントの母メアリがクェーカー教徒であったことに関する記述がある。

メアリは粗暴な行動にも言葉にも堪へ得ぬ程柔和な女性であった。ロンドンの或る公園の近くに住んでゐた頃、兵士たちの姿を見るのを怖れて回り路をした程であった。恐らく戦争の惨劇を聯想したからなのであろう。フィラデルフィアのクェーカーの家に生まれた彼女が無抵抗主義を信じ、暴力に対するに暴力を以てすることを極度に排斥したのは当然で、かうした気質はそのままリー・ハントに伝はり、彼の思想及び行動に著しく反映してゐるのが看取される。（上代10）

上代氏はハントの母が非暴力の無抵抗主義者であったことが、息子に影響を与えたと考えている。さらに上代氏は植村氏同様、ハントの父アイザックが牧師であったことに注目している。

幼いリーの家庭教育に於いて特に留意すべき点は宗教的方面であった。アイザックの家庭に於ける話題の中心は常に政治かさもなければ宗教であった。殊に宗教問題は彼が最も大きな興味を持ってゐたところである。アイザックは聖書に精通し説教集を読むことを殆ど趣味とした。晩年所謂オーソドックスの立場より解放せられて、ユニテリアンとして又更にユニヴァーサリストとして基督教の教義に囚はれず、人間基督の愛の力に宗教の根源動力を見出したのである。これは後年リー・ハントが *Christianism* で執つてゐる立場と略ぼ同一であるが、かうした宗教的雰囲気にも育まれたリーが後日真剣に宗教、社会、政治、文学等々、あらゆる精神文化の革新を叫んでやまなかつたのも当然である。（上代12）

父は宗派の枠を超えて人道主義を求めたことがわかる。

次に、ハントが主宰した雑誌『エグザミネー』の説明に移ると、上代氏による同誌の説明は、この雑誌の命名に関し、スィフトの同名の雑誌との違いに着目し、ハントの活動時期を幕末に重ねた点で、上述の齋藤氏の説明と共通していることがわかる。



*Examiner*といふのは、もとスウィフト (Jonathan Swift) を中心とした保守党派の機関紙の名称であった。名称は採用してもその主義主張において両者は正反対の立場にあることは明瞭である。リー・ハントは無謀にもスウィフトのやうな機智と才筆を *Examiner* 紙上に発揮したい念願でその名にあやかたものであると云つてゐる。彼は *Examiner* 主筆として本格的にジャーナリストの生涯に入ったが、年僅かに二十二歳、意気正に天に冲するの概があつた。一切の私利を捨て、公益のため赤誠を盡さんとした彼の胸中、恐らく我が国明治維新の志士の心境と比儔するものがあつたであらう。彼は自由のため何ら顧慮するところなく叫ばんと欲するところを叫んだ。*Examiner* の読者は果して彼の熱と力とに無限の魅力を感じずには居られなかつた。

(上代 40-41)

上代氏はハントを「明治維新の志士」と重ねることにより、「世直し」の必然性、そして正統性を説明している。その上で上代氏は、ハントが「父王ジョージ三世の治世の間は保守党政権に反対して、野にあつた自由党に多大の希望をかけられていたが、一度摂政になると政治的無節操を發揮して保守党内閣を居座らせた許りでなく私生活に至つては沙汰の限りで」「国民の等しく面をそむけるところであつた」(上代 50) 摂政皇太子に対し行つた諫言を引用した上で次のように述べている。

斯うした嘲馬は当時の実情からみて如何にも冷水三斗の思ひがあつたに違ひなからうが、厳正な批評としては餘りに極端であり、餘りに露骨な言ひ分であらう。如何なる時代に於いても斯ういふ酷評が不問に付される筈がない。又彼が如何に筆誅を加へたところで摂政皇太子を悔悟せしめることは不可能であつたのみならず、又間接にせよ保守党政府の反省を促すことは猶更困難であつたであらう。然し顧みれば創刊以来終始保守党政策を攻撃し、特権階級の腐敗を暴露し、新聞雑誌の無主義無節操を指摘してやまなかつた *Examiner* の立場から其の筆鋒を摂政皇太子に向けたことは恰も一石三鳥を克ち得たにちがひない。ただ、問題は、ハントが熱望した真の自由と民権の確立とは斯くの如き方法では決して達成出来るものでないといふことである。而もハント兄弟にとって殆ど再び挽回し難い挫折を招来したことは真に一大痛恨事であつた。

(上代 52)

上代氏は、ハントの行動は、主張の方法論が間違つていて、彼が希求した自由と民権の確立には至らず、自分自身にも益するところがなかつたと冷静に分析している。その一方で、ハントが獄中で家族と同居すること、昼間自由に接客することを要求して許され、泰然自若とした姿勢を保ち<sup>(4)</sup>、社会的地位が上がつたことも見逃していない。

ハント兄弟が投獄の憂き目を見たのはあらゆる転向手段にも耳をかさず、飽くまで所信を曲げなかつた為だといふ真相が伝えられた時、彼等に対する同情は倍加され、自由民権のための殉教者の如く尊敬されるやうになつた。

(上代 56)

こうして増えた訪問客の中にバイロン (George Gordon Byron, 1788-1824) がいたと上代氏は書いている。

トマス・ムアがバイロンを彼に紹介したのは宛もこの時である。バイロンは当時既に



上院議員としてカトリック信徒解放運動を始め、ハントと同じ自由主義の立場に在り、随って摂政皇太子に対する *Examiner* の態度には共鳴するところ尠くなかったので、ハントの不遇の身の上を聴くに及びムアと共に彼を獄中に訪問することとなった。

(上代 57)

ここでは明確にされていないが、ハントが主張したのは、皇太子が摂政位に就く前に約束していたアイルランドにおけるカトリック信徒解放である (Blunden 69 n.1)。当時これは野党ホイッグ党の政策で (Holden 54) バイロンはホイッグの上院議員だった。「然し摂政皇太子は政治的にも人格的にも国民の期待を裏切ること実に甚しかった。即ち父王ジョージ三世治世の間は保守党政策に反対して、野にあった自由党に多大の希望をかけられていたが、一度摂政になるや忽ち政治的無節操を發揮して保守党内閣を居座らせた」(上代 50)。つまり、ハントは信教の自由を主張したのである。

そして上代氏はこの時始まったバイロンとの交流が、詩の Cockney 派批判を引き起こしていると説明している。きっかけはハントから詩の構想を聞いたバイロンが参考書として『イタリア旅行 (*Travels in Italy*)』の二巻を与え (上代 58) ハントが獄中大部分を執筆した『リミニの話 (*The Story of Rimini*)』を出獄後出版したことである。

ハントは 1816 年この詩を公にするにあたり、その完成の為に最後まで激励と批評の労を惜しまなかったバイロンにデディケイトした。然るに当時は政治と文学とが交錯して、政敵は同時に文学上のライヴァルとせられた時代であったから、*Examiner* のライヴァル *The Quarterly Review* は得たり賢しと先づハントの献本の辞に征矢を放った。即ち “My dear Byron” とは餘りに社会的地位の相異を無視した不躰な言ひ方だと窘め、又 *The Eclectic* はこの物語を道徳上有害ではなからうかと評した。*Blackwood's Magazine* は一見 *Quarterly Review* の批評を公平に批判するかに見せて、実はそれにもまして酷評を浴びせ、*Story of Rimini* のテーマが明らかに不倫の恋を賛美するものであると誣言して、“Cockney School” の指導者ハントに詩人として人として致命的な毒矢を酬いようとした。(中略)

*Blackwood's* はハントを中心としてハズリット、シェリー、キーツは勿論、ラム、ヘイドン、バリー・コーンウォール (プロテクター) 等多くの所謂ロンドン子を侮辱的に “The Cockney School” と呼んだが、此の時より、“Cockney School” は *Quarterly Review* と *Blackwood's* の批評の対象として機会ある毎に攻撃の矢面に立たなければならなくなった。従って *Story of Rimini* はありとあらゆる冷笑熱罵を浴せかけられた。流石のハントもこれには可成り悩まされたに違ひない。ただ友人の間では好評だったので落胆はしなかった。

(上代 82-83)

問題となっている『リミニの話』はダンテ (Dante Alighieri, 1265-1321) の『神曲 (*The Divine Comedy*)』(1304-7) の中の一挿話「パオロとフランチェスカ」に想を得たものである。本論文の第一章で、齋藤氏がブランデン氏の『リー・ハントのエグザミナー調査』の書評で、「詩の Cockney 派」と批判され評価が低かったハントの再評価を行ったことを高く評価している部分を引用したが、上代氏もその視座に立ち、ハントとバイロンとの結びつき、さらにいうならばハントとバイロンが標榜している自由主義に対する批判と捉え、ハントの活動を重要視している。

このように、ハントに対する批判が、その時代の政治と深く結びついたものであるなら



ば、時代の変化とともに評価が変わったことにも納得がいく。上代氏は、自身のリー・ハント伝の巻末の年表で、時代がジョージ王朝時代からヴィクトリア朝（1837-1901）へと移り替わり、政権交代が安定した後のハントの名誉回復について触れている。ハントの年金授与に関しては、既にブランデン氏が自身の『リー・ハント伝』の本文中で、ホイッグ党の党首ジョン・ラッセル卿（John Russell, 1792-1878, 首相 1846-52, 1865-66）からの手紙を引用して詳述しているが（Blunden 297）、上代氏は1847年6月22日、当時63歳であったハントが、「皇室下賜の年金」二百ポンドを受けたと記し、名誉回復を決定づけた。上代氏はさらに同年ハントの為にマンチェスターとリヴァプールで、ベン・ジョンソン（Benjamin Jonson, 1572/3-1637）の劇「癖物ぞろい（“Everyman in His Humor”）」が上演され、420ポンドが贈呈されたと述べている（上代 182）。

1955年上代氏は、湯川秀樹氏（1907-1981）らと共に、核兵器の廃絶と世界平和を訴える『世界平和アピール七人委員会』の一人となるが（『上代タノ先生』18）、最後に、のちに平和主義者として表舞台で活躍することになる上代氏がそれに先立ち『リー・ハント伝』の中で、ハントの反戦詩「キャプテン・ソードとキャプテン・ペン（“Captain Sword and Captain Pen”）」（1830）を紹介していることに注目したい。まず、上代氏は、ハントがこの詩を執筆した背景について触れている。

1830年の頃と言はれてゐる。欧州の国際情勢も表面は極めて平穏であったが、何処か一抹の戦雲が漂うてゐたものと見え、巷間頻りに戦争の噂が交されてゐた。戦争と平和の問題が切実にハントの創作心を刺激し始めたのは此の頃からである。其の昔アメリカ独立戦争に関する物語を母から聞かされて、童心に受けた衝撃は今尚ほ脳裏に刻まれてゐる。又ハントはかねて戦争の惨禍に傷けられた母の気質が彼自らの性格に間接に影響しているものと思つてゐた。斯うした意識が根強く、底深く横はつて、非戦論者ハントを基礎づけてゐた。（上代 143）

ハントが非戦論者となるきっかけとなった「アメリカ独立戦争に関する物語」とは、ハント誕生前、元来王党派（Tory）であった父が、1765年の英国議会で印紙税法案の通過以来、反英感情が強くなっていたフィラデルフィアで、事ある毎に母国政府の立場を擁護してはばからなかったために、市民の怒りを買ひ九死に一生を得てロンドンへ亡命した、というものである（上代 4）。上代氏はハントには父と共通する「殉教者的精神」があり、「正義の為には身命を賭して敢へて意とせぬ悲壮な良心、少くとも所信を披露するに当っては率直果敢、正直一途な性格」が見てとれるとしている（上代 5）。

従つてハントは、「キャプテン・ソードとキャプテン・ペン」で、第二次世界大戦下ブランデン氏が“In a Margin”で行うことになるような、誰も理解してくれないかもしれない、むしろ自分自身が非難されることになるかもしれない非戦論を真剣に展開したのだった。上代氏は、戦勝を重ねることによって支配者欲にとりつかれたキャプテン・ソードがキャプテン・ペンに立ち向かつた結末部分を次のように紹介している。

キャプテン・ソードが翌朝目を醒ました時、世界は一変してゐた。憤怒も誇りも高慢も消え失せ、武装を解除した人々が居並んでゐた。戦ひは既に終つた。人間は互に傷くることなくして強く正しく生き得る。然しキャプテン・ソードは依然自分の意地を押通し、自分の思想に執着し、枉げられず、「鍛へ直されず、自分の城壁に寄りかかつた儘錆びついてしまつた」。正義と愛の世界は、人類不滅の霊を享けつゝだキャプ



テン・ペンに依って建設されるのであった。(上代 146)

上代氏はこの詩について、ブランデン氏が自身の『リー・ハント伝』(1930)で指摘したとおり、効果的な場面が迅速に次々と展開してゆくのは、映画的な特徴であり、「手法において多分に現代味を漂はせている」と述べているが(上代 144)、時代の空気を感じ取っていたのであろうか。氏自身のリー・ハント伝出版の翌年には日中戦争がはじまっている。それでも上代氏は、第二次世界大戦下、英語や英文学を教えること自体が難しくなる中で、戦後の交渉、共存を視野に、勤労働員中の学生に教え続けたというエピソードが残っている(島田 94)。一方、『リー・ハント伝』でこの詩を日本に紹介したブランデン氏は、戦後文化使節として日本を再訪した際齋藤氏と再会を果たし<sup>(5)</sup>、各地で講演を行う中、被爆地広島を訪れ、平和への祈りを詩「ヒロシマ 1949 年 8 月 6 日に寄する歌 (“HIROSHIMA: A Song for August 6<sup>th</sup>, 1949)”) に託した。この詩は、原爆投下 30 年後の 1975 年、折しもエリザベス女王 (Elizabeth II, 1926-2022) 夫妻が戦後初来日を迎えた年に、当時広島大学文学部長であった梶井迪夫氏 (1914-1992) によって再発見され、広島日英文化協会が中心となり詩碑が作られている(西村、貝嶋 41-42)。

## おわりに

日本におけるリー・ハント研究は、旧東京大学で教鞭をとり、ハント研究を行ったブランデン氏によって促進された。ハントの存在は、ブランデン氏によってはじめて知らされたわけではないが、第一次世界大戦の従軍経験から平和を希求する詩人となった氏が注目したことによって、氏を支援しそこに自由、非戦、平和へのメッセージを読み取った齋藤氏と上代氏によって、ハント研究は核兵器廃絶と戦争のない世界への道を準備したと言える。

## 註

- (1) 齋藤氏は、ブランデン氏が使用した『エグザミナー』について「私がロンドンの古本屋のカタログで見つけて、その週刊誌の 1808 年創刊の翌年から 50 年分を注文した。それが 1926 年東大教師だったブランデンがちょうどリー・ハントを研究していたころだったので、*Examiner* が着いたと言ったら、彼は非常に喜んで、早速週に 1、2 回うちに来て、彼がページをめくりながら言うことを私がメモしたりした。この雑誌は誰でもすべて無署名で、政治、経済、文学、演劇、音楽などあらゆる方面のことを書いていた。ブランデンは、それら無署名の論文を最初の数行だけ読んで、これはシェリーだ、ハントだと、すぐに筆者の名を挙げた。」と当時の模様を回想している(齋藤『或る英文学者の回顧』88)。
- (2) ブランデン氏のリー・ハント研究に関する林氏の貢献は、岡田純枝氏による *Edmund Blunden and Japan: The History of Relationship* (Macmillan, 1988) の付記「エドモンド・ブランデンのために行なった林アキの仕事年表 (Appendix: Chronology of Aki Hayashi's Work for Edmund Blunden)」およびその日本語版に詳しい (Okada 212-224, 岡田 319-307)。
- (3) 上代氏は 1905 年日本女子大学に進学後、同大学から依頼を受けて学生を受け入れていた暁星寮に住んだ。この寮は、英文学教授で英国聖公会福音宣教協会の宣教師であった E・ダグラス・フィリップス氏 (1872-1965) により経営されていた。暁星寮時代、聖書の講義を行っていたフィリップス氏に質問を繰り返した上代氏に対し、フィリップス氏は聖書を知的に語る知識人として、1907 年フレンド派の新渡戸稲造氏 (1862-1933) を紹介している(島田 31-32)。上代氏は、当時はフィリップス氏とのつながりから聖公会の教会に出席し、1909 年 12 月 24 日フィリップス氏が所属する東京市牛込区矢来町の聖バルナバ教会で洗礼を受けた。しかし、1907 年の出会い後、急速に新渡戸氏と親しくなり、新渡戸氏の支



援を受けアメリカのウエルズ女子大学、ミシガン大学、そしてイギリスのケンブリッジ大学への留学を実現した。その後国際連盟事務次長に就任した新渡戸氏の指導のもと、ダブリンの婦人国際平和自由連盟第五回総会で、日本代表として出席していた上代氏は、1926年ジュネーブのクェーカーの教会における新渡戸氏の敬虔な祈りに心打たれ、平和主義の教義を持つフレンド派〔クェーカー〕に接近していった（島田 44-45、56-57、61）。そして戦後 1950 年正式にクェーカー教徒となっている（上代たの文集 446、杉森 293）。

- (4) この時期のハントの身の処し方は、旧東京大学で、ブランデン氏から直接講義を聞いた学生的心にも残るものであった。福原氏は、1963年ブランデン氏の『英文学講義 (*Lectures in English Literature given in the Imperial University, Tokyo.*)』(1927)の再版にあたり、「私にとっては、Essayistsの論が最も思い出が深く、多くの教を受けたもので、特にLamb, Leigh Hunt, De Quincyについては、なみなみならぬ興味を持って読み、いまでもいくつかの箇所は覚えている。」と語り（福原「ブランデン氏」8-9）そのうちの 하나가「ハントは天井を夏の空のように青白に塗り立て、壁にはバラの茂った四目垣のような壁紙を貼り、自宅から本棚だのピアノだの持ち込み、見舞に来た人が感心すると外へ連れ出して小さな花園を見せて驚かせた。」（福原「洒落をいうラム」41）であったことを示している。また、竹友藻風氏（1891-1954）は、「私どもがリー・ハントに服するのは、彼がどのような窮境にある時にも胸中常に一味の風流を残して、花に戯れ、鳥に遊ぶといふやうな静かな快樂の小天地をもっていたことである。ロンドンに塵の立つ日は塵を怒らずして塵の中の滑稽を思へ、と言ってあるが、リー・ハントの生涯を通じてこの肯定的な諧謔の心もちがすべての行動や作品の上に現はれてある。冬の夜の爐のほとり、夏の日の本かげに携へられ、つねに爽やかな風韻を伝えるのは文学が人生に與へる功績の最も尠いものではない。この意味に於けるリー・ハントのエッセイズはこれから後も長く生命を失はないものであらう」（竹友 173）とその高邁さに感服している。
- (5) 戦後東京女子大学の学長となった齋藤氏は、イギリス政府の要請に応じ、駐日英国大使の教育顧問として派遣されたブランデン氏が同校に講演に訪れた際に英語の校歌の作詩を依頼した。これが、今も東京女子大学で歌い継がれているカレッジ・ヒムである（齋藤「Mr. Edmund Blunden」1）。

#### 引用文献

- Blunden, Edmund. *Leigh Hunt's "Examiner" Examined*. Archon Books, 1967.
- Holden, Anthony. *The Wit in the Dungeon*. Little Brown, 2005.
- Hunt, Leigh. *Autobiography of Leigh Hunt*. London: Smith, Elder, 1850.
- Ingpen, Roger ed. *The Autobiography of Leigh Hunt: With Reminiscences of Friends and Contemporaries, and with Thornton Hunt's Introduction and Postscript*. Volume I. Westminster: Archibald, 1903.
- Okada, Sumie. *Edmund Blunden and Japan: The History of a Relationship*. Macmillan, 1988.
- [植村正久]「病苦によりて志を立つ」『福音新報』1901年4月24日、709-711頁。
- 梅本順子「エドモンド・ブランデンとラフカディオ・ハーンーブランデンのハーン観を中心に」『国際関係研究』第24巻第2号、平成15年10月、43-59頁。
- 岡田純枝『ブランデンの愛の手紙 ひとつの日英文化交流史』平凡社、1995年。
- 貝嶋崇「エドモンド・ブランデン考」『比治山大学紀要』第25号、2018年、37-47頁。
- 上林暁「回想のブランデン先生」文藝春秋 昭和23年3月、38-40頁。
- 齋藤勇「或る英文学者の回顧」『リクルート・キャリアガイド』1978年10月、84-90頁。
- 『イギリス文学史』研究社、1990年。
- 『英米文学年表 研究社英米文学評伝叢書 別冊1』研究社、昭和14年。
- 「序」『英文学の主流』エドモンド・ブランデン著、阿部知二、尾上政次訳、大阪教育図書、昭和23年、11-15頁。
- 「ブランデン」『日本の英学100年 大正編』研究社、1968年、110-124頁。
- 「Blunden氏の新著：“Leigh Hunt's "Examiner Examined, 1808-1825", EDMUND BLUNDEN, R. Cobden-Sanderson, 15s.」『英文学研究』第8巻第4号、1928年、625-629頁。
- 「Mr. Edmund Blunden と本学校歌」『学報』Vol. III. No. 3 1950年5月、1頁。
- 齋藤勇監修 西川正身・平井正穂 編集『研究社 英米文学辞典』第三版、研究社、1985年。
- 齋藤勇編『植村正久文集』岩波書店、1939年。



- 齋藤晴恵「わが国におけるキーツ受容——読売新聞の分析を中心に」明星大学全学共通教育研究紀要 第1号、2009年3月、39-60頁。
- 島田法子、中寫邦、杉森長子『上代タノ——女子高等教育・平和運動のパイオニア』ドメス出版、2010年。
- 上代たの『Leigh Hunt』研究社、昭和11年。
- 『上代タノ先生』日本女子大学図書館友の会。
- 上代たの文集編集委員会編『女性教育者の先達——上代たの文集』1984年。
- 竹友藻風「リー・ハント」『エッセイとエッセイスト』高桐書院、昭和22年、164-183頁。
- 富山茂「あとがきにかえて」エドモンド・ブランデン『さよなら日本』富山茂訳、角川書店、1957年、148-174頁。
- 西村文「エドモンド・ブランデン詩碑」『中国新聞』2012年4月16日 <https://www.hiroshima-peacemedia.jp/?signpost=エドモンド・ブランデン詩碑>。
- 福原麟太郎「エドモンド・ブランデン」『心：総合文化誌』27(4)、1974年4月、105-106頁。
- 「洒落をいうラム」『学鑑』58(6)、1961年6月、38-41頁。
- 「ブランデン氏の『英文学講義集』」『英語研究』52(11)、1963年11月、8-9頁。







### Studies regarding Leigh Hunt in Japan

Mitsuki EZAWA

Edmund Charles Blunden, a pacifist and early biographer of James Henry Leigh Hunt, was invited to be a professor of English Literature at Tokyo Imperial University before the Second World War. Blunden's great influence on Japanese students and scholars as a teacher has often been compared with that of Lafcadio Hearn, another renowned educator, and he has been memorialized by a monument featuring his poetry in Hiroshima. This study focuses on his sincere friendship with Takeshi Saito, his colleague at Tokyo Imperial University and how Blunden encouraged the Japanese scholars and prepared the way to peace before and after the Second World War through his studies regarding Hunt.

According to Saito, who admitted Blunden's self-effacing faith in the Japanese during the Sino-Japanese War, most of Blunden's studies regarding Leigh Hunt, such as *Leigh Hunt's "Examiner" Examined* and *Leigh Hunt: A Biography*, were written in Tokyo, and constituted the result of their combined efforts. He accentuated these facts in his review of these studies, and so did Blunden. In the preface of the former, Blunden expresses his gratitude to Saito, who prepared *Examiner* for his own sake, for his appropriate advices. Although Saito did not clarify the reason for his contribution, this study explores it by examining reminiscences regarding Masahisa Uemura, a clergyman who wrote a brief biography on Hunt fighting for freedom and public welfare. Furthermore, based on another remark from Saito, this study examines another biography on Hunt by Tano Jodai, who came to appeal for the prohibition of nuclear weapons after the war. It is remarkable that both Blunden and Jodai focused on Hunt's anti-war poem, *Captain Sword and Captain Pen* in their biographies.

Thus, Blunden promoted studies regarding Leigh Hunt in Japan, and this encouraged the Japanese who sought peace.



人文·自然研究 第18号